

〈学校研究〉

H20,21 研究主題

自分を高め、ともに学び合う生徒の育成

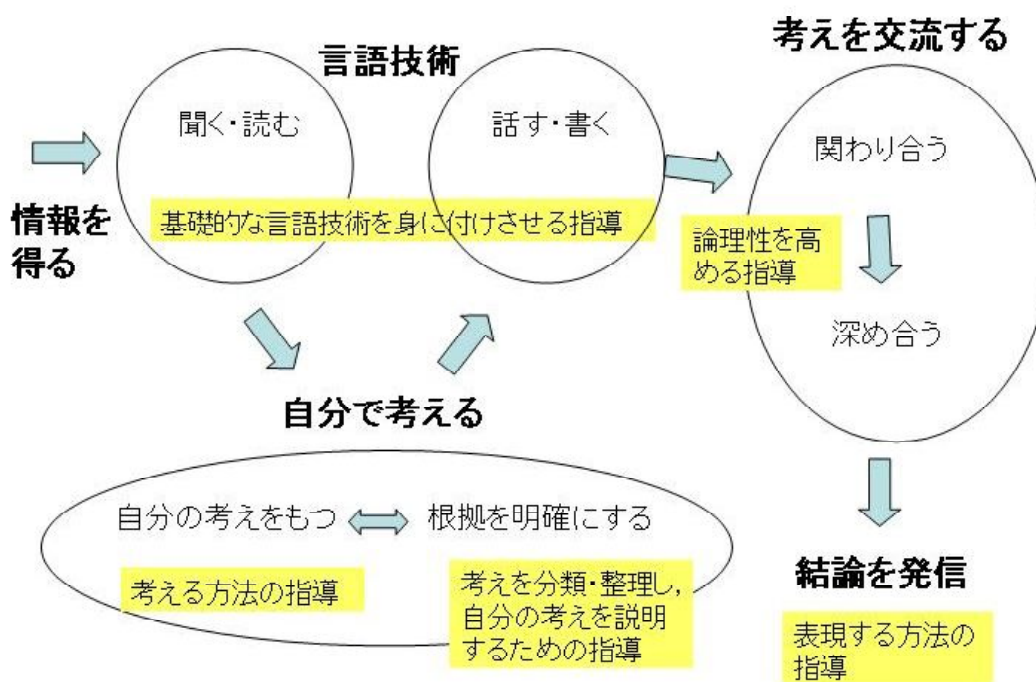
—自分の考えをもち、関わり合い、深め合う授業の工夫—

主題設定の理由

平成15～19年度までの5年間、「自分を高め、ともに学びあう生徒の育成 —基礎基本を重視し、個に応じた指導の工夫—」というテーマで研究を進めてきた。主題は校訓「自主、協同、責任」をもとにしたもので、互いに高め合う主体的な態度が全ての学びの基礎であるとの考えからである。副題は、学力の2極化傾向に対応するものであった。これらの研究成果は蓄積されているが、平成20・21年度石川県教育委員会「活用力」向上モデル校の指定を機に、従来の基礎・基本に加えて活用力*（知識・技能を活用し、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等）の向上を目指して、研究をさらに進めていこうと考えた。

全国学力調査等の分析から、本校の実態として活用力に弱い部分があることがわかってきた。活用力を育てる指導の場を考えるため、情報を得てから結論を発信するまでの課題解決時の学習の流れを追ったものが右図である。得た情報を聞き・話し・書くには「言語技術を身に付けさせる指導」が欠かせない。また、情報をもとに自分で考える場面では「考える方法の指導」「考えを分類・整理し、自分の考えを説明するための指導」が、個々の考えを集めて交流する場面では「論理性を高める指導」が、結論を発信する場面では「表現する方法の指導」が考えられる。これをもとに今年度は、研究の副題を「自分の考えを持ち、関わり合い、深め合う授業の工夫」と変更することにした。「授業の中で、生徒同士が互いに関わり合い、深め合う授業」を基軸に、活用力向上の具体化と実践を進めていきたい。

* 活用力については、H20,21石川県教育委員会「活用力」向上モデル事業の定義に従った。



活用力を育成する指導の場として、どこが考えられるか

○昨年度の校内研究の取り組み（H20紀要より抜粋）

1 実践の内容

(1)各教科における活用力の捉え

新学習指導要領，全国学力・学習状況調査，国際学力調査問題などの検討などを踏まえて，各教科における活用力をどう捉えるかをまとめた。活用力については，下の規準をもとに思考力・判断力・表現力の3つの力として位置づけた。このことで知識・技能を活用する場面が明確になり，指導の具体的な手立てを考える際の参考になった。

- 判断力（文章，図表などから必要な情報を取り出し，整理する力など）
- 思考力（原因から結果を考える，結果から原因を考える，関連づける力など）
- 表現力（文字，図や式，表などを使って表現できる力，筋道を立てて説明できる力など）

各教科における活用力の捉え

	判断力	思考力	表現力
国語	テキストを評価しながら読む力 課題に即応した読む力	テキストを目的に応じて理解し， 解釈する力 多様なテキストに対応した読む力	テキストを利用して自分の考え を表現する力 自分の感じたことや考えたこと を簡潔に表現する力
社会	資料から読み取ったことを整理 し，まとめる力	予想を立て，適切な資料を選び， 考える力	考え，判断したことを分かりや すく伝える力
数学	問題文の数量，図形，表，グラ フ，統計データ，絵などの中か ら課題を解決するために必要な 要素を分析する力	分析した要素と既習事項，さらに 日常生活で経験したことを活用し 課題を解決する方法を見つけ出す 力	解決した課題の情報を正しく伝 えるために，式，図形，表，グ ラフを利用して整理し簡潔に書 く力，または発表する力
理科	自然事象から課題を見いだす力 観察・実験から得た情報を分析 する力	課題解決のための計画をたてる力 観察・実験で得た情報を解釈し， 規則性を見いだす力	観察・実験の方法を図表化，文 章化する力 導きだした自分の考えを図表・ モデル・式・文章等で説明する力
英語	まとまりのある文章や図を聞い たり読んだりする中で，概要や 要点（キーワード）を聞き（読 み）取る力	まとまりのある文章や図を聞い たり読んだりする中で行間や背景に ついて考えることができる力	話の内容やテーマなどに対して 感想を述べたり賛否やその理由 を表現する力
音楽	音楽の諸要素についての知識を 身につけ利用できる力	音楽の諸要素と表現を関連づける ことができる力	音楽の諸要素を使って表現でき る力
美術	美術作品などの良さや美しさを 感じ取り，味わう力	感じ取ったことや考えたことなど をもとにした発想や構想する力 目的や機能を考えた発想や構想す る力	発想や構想をもとに自分の思い を作品に表現する力
技術 ・ 家庭	より良い生活を目指し，生徒自 らが課題を発見し，思考力を総 合して解決をはかる力	課題に対して既習事項を活用し， 様々な角度から考える力	課題に対して言葉だけではなく， 設計図や献立表などの図表を使 い表現する力
保健 体育	知識・技能を生かし，積極的に 運動やスポーツに取り組む力	運動の結果から，技能向上のため の課題を見つける力	自己の能力に応じて，体力や運 動技能の向上を目指し活動する 力
特別 支援	文章から課題解決に必要な情報 を取り出す力	根拠のある原因や理由を考える力	自分の考えや思いを伝える力

(2) 活用力を評価する問題の作成と実践

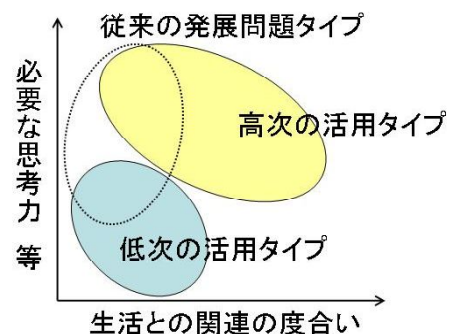
活用力に関わる生徒の変容をどう評価するかは、喫緊の課題である。しかし本校の現状として、各教科における活用力のイメージは構築されつつあるものの、具体的に従来の問題とはどこが異なるのかを検討していく必要があった。そこでまず、活用することのイメージを具体的に捉えるため、公表された活用力を問う問題を解くことにした。国語、数学については全国学力調査のB問題を、その他の教科については国際学力調査のPISA型読解力に関する問題を利用した。その結果、問題の特徴として、以下の傾向があることがわかった。

- ・生活の中の課題を教科で得た知識・技能を使って解決する。
- ・課題を解決する方法や自分の考えを文章や図で説明する。
- ・曖昧なデータ(使えるものもあれば、使えないものも。情報不足なことも)・多様なスタイルの情報(文章、図、グラフ、絵)の中から必要なものを判断し、考察をして結論を導き出すことが多い。逆に、結論から原因を類推することもある。
- ・内容が合科的、学際的な問題もある。(国語なのに図やグラフがある。数学なのに実験がある。しかし、教科のねらいをはずさない。)

これを受けて夏季休業中に、活用力がついたかどうかを評価する問題を各自数問ずつ作成した。この際、以下の事項を共通理解した。

- ・習得した知識・技能を活用する問題とする。
- ・課題の内容をどの程度まで実生活に当てはめるかで、問題には幅が出ることが予想される。
- ・全国学力調査のような内容もあれば、生活との関連が低い従来のような問題もありうる。
- ・従来と同様な問題でも、知識・技能を活用するものであれば評価問題として可とする。

当初予想したように、集まった問題には活用の度合いに幅がみられ、大きく3つのグループに分けられた。右図は、横軸に生活との関連の度合い、縦軸に解答に必要な思考力等をとったものである。1つ目は、必要な思考力等と生活との関連の度合いとも大きく、全国学力調査のB問題に類似した問題である。これを「高次の活用」が必要なタイプとした。2つ目は、生活との関連はあるが比較的容易な問題である。これを「低次の活用」とした。3つ目は、思考力は必要であるが生活との関連が薄い、従来の発展問題に多かったタイプである。教科によってはその特性もあって、生活と深く関連した問題だけで学習を進めていく場面ばかりでないものもあるので、評価問題としてはこのいずれのタイプに集中させるような縛りを掛けることはしなかった。日々の学習活動の中で、低次の活用から、より高次の活用へと課題解決を繰り返すことにより、実社会での生きる力(活用力)につながるものと捉えることにした。



作成問題にみられる質的なばらつき

教科によってはその特性もあって、生活と深く関連した問題だけで学習を進めていく場面ばかりでないものもあるので、評価問題としてはこのいずれのタイプに集中させるような縛りを掛けることはしなかった。日々の学習活動の中で、低次の活用から、より高次の活用へと課題解決を繰り返すことにより、実社会での生きる力(活用力)につながるものと捉えることにした。

次に教科部会において、評価問題を検討・修正した。検討の視点として全体で共通理解したことは、以下の事項である。

- ・どんな知識・技能を活用する問題であるか。
- ・評価したい力(思考力・判断力・表現力等)が読み取れる問いかけになっているか。
- ・教科のねらいから外れていないか。
- ・難易度は妥当か。無解答が多くならないか。このことを考慮せずに安易に「説明しなさい」の問いかけになっていないか。

- ・活用の途中過程も見取ることができる問いかけがのぞましい。
- ・評価問題の無解答を減らすには、どのような指導が必要か。

教科部会では定期テストや小テストとして実践に耐えうる問題をいくつか選定し、その問題をもとに、正答率を高めるのに必要な指導の工夫は何かを考えてもらった（下図参照）。これに際しては、以下にあげる中教審答申（H20.1.17）で例示された思考力・判断力・表現力等の育成において不可欠である活動を共通理解した。

- ・体験から感じ取ったことを表現する。
- ・事実を正確に理解し伝達する。
- ・概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- ・情報を分析・評価し、論述する。
- ・課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- ・互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

実施後の結果やそこから見える指導のあり方については、次項に各教科の部分で記述する。

単元名・題材名（オームの法則） 学年（ 2年 ） 氏名（ ）	
学習活動	教科における活用力
①加える電圧を変えたときの電流の変化を測定する方法を考える。 ②その結果を予想する。 ③結果を一覧表にまとめ、その値をグラフにプロットする。	課題解決のための計画を立てる力（思考力）
④全体の傾向をみて、グラフを引く。 ⑤グラフから、電圧と電流の間には比例関係があることを見いだす。	観察・実験から得た情報を分析する力（判断力） 観察・実験で得た情報を解釈し、規則性を見いだす力（思考力）
⑥互いのグラフの形や値変化の傾向を確かめ合い、それを根拠にして比例関係が言えることを確認する。 ⑦レポートに、結論とその理由について文章で表現する。	導きだした自分の考えを図表・モデル・式・文章等で説明する力（表現力）

それぞれの学習活動で、どのような工夫を行うか

- ①予想前に、電圧が電気を押す圧力に、電流が押して流れる水の量にたとえられることを確認して、生徒の中にイメージを作らせる。（思考力）
- ②実験レポートの項目に予想欄をもうけ、これを書く時間を保障する。（思考力）
実験前に、教材提示装置（映像）を使って、図を指しながら実験方法を説明させる。（表現力）
- ③④前時までには、一覧表の書き方、グラフの引き方を例示しながらしっかりと習得させておく。（技能の習得）
- ⑤実験結果を、教材提示装置（映像）を使って説明させる。また、その説明の良かったところ、改善したらよいところを指摘する。（表現力）
- ⑥説明する文章を書かせる際、書き出しの言葉と必ず使うキーワードを確認する。（表現力）
- ⑦レポートを添削し、生徒に返す。（表現力）

活用力を育成するために必要な指導の工夫は何か（理科の例）

教科	単元	作成者
保健体育	陸上競技(走幅跳)	

結果記録：走幅跳の記録を自分で出す

問題1 自分の助走距離と跳躍記録との関連を見て、自分に合った助走距離を見つけ出し、助走しなさい。

助走距離	10m	15m	20m	25m	30m
跳躍記録	3m70	3m80	4m05	3m90	3m80

問題2 下の走幅跳のそり跳びの図を見て、ポイントを書き出し、図を真似て跳躍しなさい。

注意すべきポイント

評価したい力
 問題1：自分のデータから走力と跳躍記録との関係を分析し、自分に適切な助走の方向を導き出す力
 問題2：図を見て、記録向上のために必要なポイントを理解する力
 図を見て、記録向上のために必要なポイントを把握し、真似をして体で表現することができる力

社会	世界と日本の資源と産業	作成者
----	-------------	-----

資料1は2002年のA～Cの国々の農業について示しています。以下の問いに答えなさい。

資料1

	農業従事者数(万人)	耕地面積(万ha)	農業用トラクター保有台数(万台)
A	245	476	203
B	51,095	15,398	93
C	291	17,807	480

(1) 資料2は資料1の表の数値をもとにB国とC国が示されています。A国を示すものをグラフ中のア～エから1つ選びなさい。

資料2

(2) 資料1と資料2から、C国で営まれている農業の特色として考えられることをB国と比較して書きなさい。

解答 (1) イ
(2) B国と比べて、多くの機械を使い、少ない労働力で、広い土地を耕作している。

評価したい力
 (1) 新たな項目の数値を、資料をもとに計算して表現する力
 (2) 資料を読み取り、文章で表現する力

教科	単元	作成者
英語	3年 Speaking Plus 3	

問題1 あなたは若菜駅のホームで女性に上田駅への行き方をたずねられました。図を見て対話文の空欄に適切な英文を書きなさい。

Woman: Could you tell me how to get to Ueda?

You: Sure. ① Take the next green train to Mita, and change trains there.

Woman: How many stops is Mita from here?

You: ② Four stops.

Woman: Which line should I take from Mita?

You: ③ Take the Chuo Line.
④ It's the yellow train on Track 3.

Woman: I see. Thank you very much.

You: ⑤ You're welcome.

評価したい力
 ①：電車での行き方をたずねられた時に、図とその情報を使ってわかりやすく英語で教える力。
 ②：お礼を言われた時に英語で一言返す力。
 ③～⑤：正確に英文を書く力。

教科	単元	作成者
理科	地震(1年)	山本実希

問題1 2007年3月25日、9時42分00秒に、能登半島地震が起きた。下の図は、各地に初期微動が到達した時刻(秒)である。これをもとに、到達した時刻を5秒ごとにめらかな曲線で結びなさい。また、この作業からわかる、地震の津れの伝わり方の特徴を簡潔に書きなさい。

①中に珠洲、高山、敦賀を、それぞれ通るめらかな曲線を3本引く。
②正しい深さで、すべての方向に伝わる。

問題2 地震の被害を最小にするために、地震波の到着を直前に知らせる装置が開発されている。地震の大きなゆれがくる数～数十秒前に、これを感知して警報で知らせるものである。なぜ、このようなことが可能なのか、そのしくみを簡潔に書きなさい。
P波とS波の速さのちがいがあがあるために、大きなゆれ(主要動)の前に小さなゆれ(初期微動)が必ずくる。そのため、小さなゆれを地震計で感知すれば、地震波の到着が予測できる。

問題3 下図の場所にいるときに、地震の大きなゆれを感じ、その場でしばらくいとゆれが収まった。地震の被害を最小限にするために、次にあなたはどうな行動をとりますか。その理由もあわせて書きなさい。

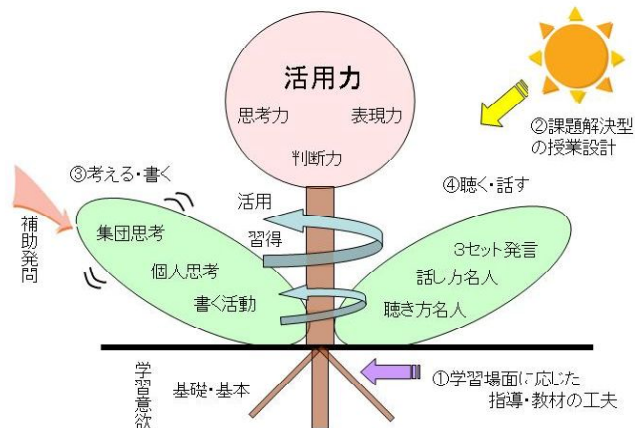
(例) 行動：揺れ高い場所に移動する。理由：揺れがくると、津波がくる可能性があるから。

評価したい力
 問題1：地震波の伝わり方をデータから読み取って、図で表現する力。
 また、将来に向けた防災力という視点で、能登半島地震という実体験を取り入れた。
 問題2：地震発生の原理を、文章で論理的に表現する力
 問題3：図から自分が置かれている状況を読み取り、次の行動を科学的に考える力。
 また、自分の考えを文章で表現する力。

作成した活用力を評価する問題の例(体育, 社会, 英語, 理科)

(3) 授業づくりの視点

冒頭に上げた活用力を育成する指導の場と今までの研究成果を考慮して、授業づくりの視点は、「①学習場面に応じた指導・教材の工夫、②課題解決型の授業設計、③個人思考・集団思考の設定と補助発問の導入、④聴き方・話し方の指導の工夫」の4つとした。活用力向上の工夫として、視点②～④の項目は学校全体で共通して行うものである。視点①については、内容は細かく限定していない。これは、各教科部会から多様なアイデアが出てくることを期待し、将来の発展性を考慮したためである。



自分の考えを持ち、関わり合い、深め合う授業の工夫

①学習場面に応じた指導・教材の工夫

- ・視点②～④を授業で具体化する段階で、教科や教材、学習場面に応じて様々な工夫（例えば、個別課題の設定、思考場面のルール、表現力を高めるレポートの形式など）が必要と考えられる。また、視点②～④とは別の切り口からの工夫（例えば、視聴覚教材の利用など）も多く存在する。これらの学習場面に応じた具体的な工夫を視点①とする。視点①の工夫は、指導案の授業展開や「指導上の留意点」「支援」の部分にあらわれる。
- ・将来的には視点①の工夫を類型化して、個人レベルから教科、学校全体へ広げていきたい。「各教科における判断力・思考力・表現力」を頭に置きながら、具体的な手立てに向けて教科の独自性を発揮する項目である。

②課題解決型の授業設計

- ・授業の流れとして、**課題設定** → **個人思考** → **集団思考** → **まとめ** を基本とし、課題解決型の授業設計とする（指導案参照）。
- ・課題提示への工夫があるか。意欲を高め、生徒の課題意識を明確にしているか。
- ・まとめがなされているか。生徒がわかったこと・学んだこと等を自覚できるか。


③個人思考・集団思考の場の設定と補助発問の導入

- ・学校研究のテーマ「自分の考えを持ち、関わり合い、深め合う授業の工夫」を具体化するものとして、「自分の考えをもつ」場面と「関わり合い深め合う」場面を取り入れる。「自分の考えをもつ」場面は **個人思考**、「関わり合い深め合う」場面は **集団思考** として指導案に標記する。
- ・**個人思考** では、**書く活動** を取り入れる。書く活動には、「意識的に考えさせる」「考えを自分の言葉で表現させる」「教師が思考を把握できる」の3つの意図がある。この段階で無答にならないよう、課題提示や支援に工夫する。
- ・**集団思考** では補助発問を行う。補助発問には、「考えを1つにまとめさせる」「方向を変える」「視点を増やす」など、思考にゆさぶりをかけて深めるねらいがある。生徒の発言や心の動きを十分に予想して、発問を設定する。

④聴き方・話し方の指導の工夫

- ・活用力（判断力・思考力・表現力等）を向上させる1つの手段として、聴き方・話し方の指導を工夫する。論理的な発言のしかたとして結論先行の話し方（「私は〇〇さんと同じ意見で、□□だと思います。理由は、△△だからです。どうですか」）を、授業で意識させる。これを、本校では3セット発言と呼んでいる。



学 習 活 動		支援(・) 指導上の留意点(*) 評価(◆)
4	課題設定 観察1と観察2の課題を知る。 観察1 フジノハナガイは、体のどの部分をどのように使ってもぐっていくか？ 観察2 ハマグリの体を調べて、せきつい動物と似ている点をさがそう ーぜひ、〇〇をみつけてやろうー	
8	観察2の個別課題として、「自分がみつきたい器官」の名前を書く。	*解剖図を与え、手を使って解剖するよう伝える。 ・みつけられた器官、興味もった部分のみ、スケッチさせる。 ◆各部の様子やそれに対する考察を図や文章、言葉で表現することができる。(観察・実験の技能・表現) <発表・観察・レポート> *実物を指さしながら話すなど、わかりやすい発表につながるポイントを指摘する。
9	個人思考 観察2をはじめ、観察できたものをスケッチする。 書く活動	
10	集団思考 観察1と観察2の結果を、教材提示装置でスケッチと実物を示しながら発表する。	
<p>フジノハナガイは、はじめ白いひらひらしたものをあしだして、これをのばして砂をほりおこしました。そして、貝がらがもぐっていきました。</p>  <p>私は心臓を見つけました。ヒトと同じように、貝にも血液があることがわかりました。</p> <p>僕はえらを見つけました。このようにヒダヒダになっていて、魚類と同じ形なのがわかりました。</p> <p>ハマグリは、どうやって食べ物をとっているか？</p> <p>口をバクバク開いて捕まえるのかもしれない。</p> <p>白い筋肉で捕まえて食べるのではないか。</p>		
11	まとめ 入水管から水を吸って出水管からはき出すビデオ映像をみて、二枚貝が生活環境に適した体をもつことを知る。	*入水管と出水管によって、二枚貝はえらに水をぶつけて酸素を吸収すると同時に、水中のプランクトンを吸い寄せて食べることに気づかせる。
12	振り返りとして、「わかったこと」「感じたこと」を書く。	

指導案の様式 (理科)

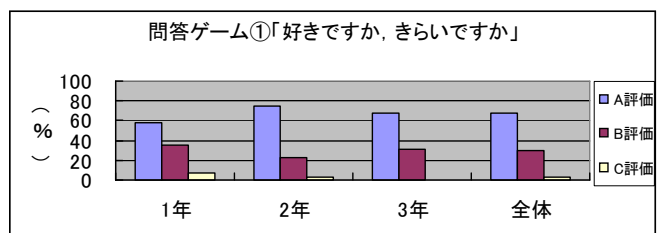
(4) 言語技術を高めるための問答ゲームの実施

2学期初めに各クラスで、問答ゲーム①②③(指導案参照)を二時間程度実施した。授業中の3セット発言のよさ(右図)を生徒に知らせるとともに、これを意識的に授業中で行うための基礎トレーニングとした。

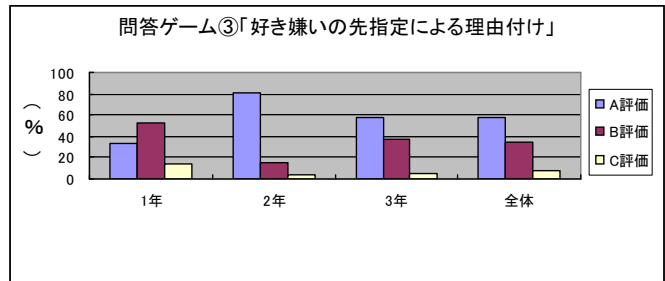
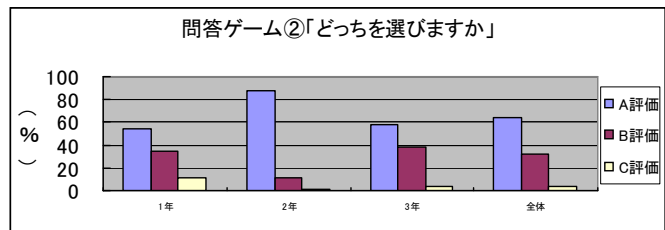
問答ゲームとして、①「～は好きですか、きらいですか」②「どちらを選びますか」③「好き嫌いの先指定による理由づけ」の3段階を設定した(指導案参照)。指導案に基づいて実習したあとに、終末で紙上問答として簡単なレポートを各自作成し、それを「主語・結論・理由の有無、理由の説得力」の観点でA、B、Cの3段階評価で担任に採点してもらった。その結果を右のグラフに示す。ゲームは①から③になるほど難易度を増すが、AB評価の割合は3学年全体でいずれも92%以上を占めている。

3セット発言のよさ 「私は〇〇さんと同じ意見で、□□だと思います。理由は、△△だからです。どうですか」

- ① 人の意見とのつながりがよくわかる
- ② 結論先行で言う、聞く側が「どこが?」「どうして?」という気持ちで聞ける。
- ③ 論理的(筋道の通った)でわかりやすい説明になる。
- ④ 思考力(考える力)がつく。
- ⑤ 論理的な(筋道の通った)表現力がつく。



問答ゲームの難易度は、やや低かったかもしれない。問答ゲーム中は和やかな雰囲気ですぐに進み、エンカウンター的な効果もみられた。何よりも、授業中に「3セット発言で答えて」というだけで、生徒が意識して発言するので各教科の中での言語活動の指導が容易になった。これは大きな成果であった。また実践から、「説得力のある理由」の「説得力」についてきちんと説明しないと曖昧な理由に傾いてしまいがちなので、指導時にはここをきちんと押さえる必要があることがわかった。これを受けて、来年度は学期に1度程の問答ゲームを実施したい。その際には、ゲームの難易度を学年に応じて少しずつ上げたり、ねらう言語技術を増やしたりして、系統的にバリエーションを増やしていく必要があると考える。



問答ゲーム① (好きですか、嫌いですか)

- 例：(食べ物) 梅干し、スイカ、納豆、しいたけ、トマト、ニンジン、ピーマン、お好み焼き、とりにく、牛乳、カツ丼、ウナギ、お寿司、ハンバーグ、カレー、麻婆豆腐、レタス、セロリ、あんみつ、アイスクリーム、フライドチキン
- (勉強) 数学、国語、理科、社会、美術、体育、音楽、家庭、技術、英語
- (スポーツ) ドッジボール、サッカー、野球、バドミントン、テニス、水泳、マラソン、バレー、卓球、ソフトボール、柔道
- (学校) 大掃除、テスト、宿題、授業での発表、朝の挨拶、近所の人との挨拶
- (季節) 春、夏、秋、冬、夏休み、冬休み、春休み、晴れの日、雨の日、雪の日

問答ゲーム①の題材の例

問答ゲーム①(好きですか、嫌いですか。)

2年組 番名前

問い あなたは昼寝が好きですか。

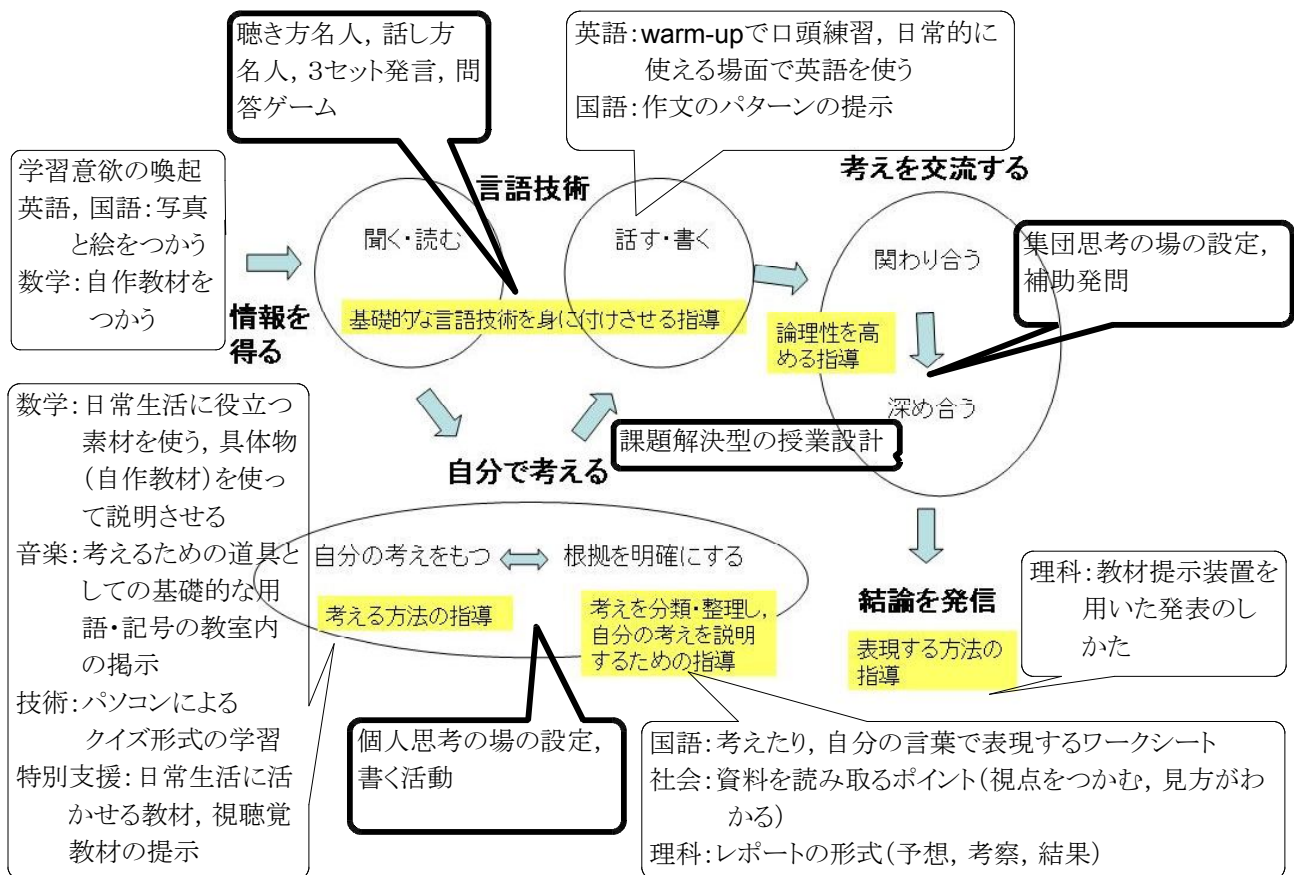
私は昼寝が嫌いです。
理由は、10月は昼寝をおと夜に寝たくないので
20月は昼寝とお時間かたいて思うからです。

評価者	名前
評価	A 型○、理由○ 「主語・結論・理由」の型で表現でき、理由も説得力がある。
	B 型○、理由× 「主語・結論・理由」の型で表現できるが、理由に説得力がない。
	C 型×、理由× 「主語・結論・理由」のうちどれかが抜けており、理由も説得力がない。

問答ゲーム①の評価問題

2 研究の成果

- 各教科における活用力の捉えを作成することで、知識を活用する場面が明確になり、指導の具体的な手立てを考える際の参考になった。
- 各教科において、活用力を評価する問題を作成・実践した。このことで、活用することのイメージを具体的に捉えることができた。その分析から、指導のあり方についても考えることができた。
- 活用力を育成する授業づくりの視点として、「①学習場面に応じた指導・教材の工夫、②課題解決型の授業設計、③個人思考・集団思考の設定と補助発問の導入、④聴き方・話し方の指導の工夫」を設定し、各教科で実践することができた。
- 各教科が実践した授業づくりの視点「①学習場面に応じた指導・教材の工夫」を活用力を育成する指導の場に位置づけると、以下ようになる。全体で共通して取り組む視点②～④は、太枠で表した。



- 言語技術を高めるための問答ゲームを行った。授業中に「3セット発言で答えて」というだけで生徒が意識するので、各教科の中で言語活動の指導が容易になった。

3 今後の課題

- 今年度で作成した授業づくりの視点をもとに実践をさらに深め、指導の具体化とその効果を検討していく。
- 評価問題に取り組んだが、無解答が多いなど指導の効果を客観的にみるにはまだ充分とはいえないものも多い。内容の検討を重ねる必要がある。
- 英語科等の授業設計において、個人思考→集団思考のパターンが難しいことへの対応を考える。
- 来年度は学期に1度程の問答ゲームを実施したい。その際には、ゲームの難易度を学年に応じて少しずつ上げたり、ねらう言語技術を増やしたりして、系統的にバリエーションを増やしていく必要があると考える。